

経 営 論 集
6 7 卷 第 4 号
2 0 2 0 年 3 月

イギリスにおける陶器タイルへの転写印刷絵付 ——18 世紀後半，リヴァプールのサドラー・グリーン社による 発明をめぐって

新 川 徳 彦

1. はじめに

18 世紀半ばに陶磁器の絵付け技法のひとつとして発明された転写印刷技術（transfer printing）は，18 世紀末から 19 世紀にかけてイギリス陶磁器製品の量産化，大衆化，市場の拡大に大きく貢献したと考えられる。本稿は転写印刷絵付け普及の端緒のひとつとなったりヴァプールのジョン・サドラー（John Sadler, 1720-89），およびパートナーであったガイ・グリーン（Guy Green, d.1798）によるタイルへの転写印刷技術の発明について考察するものである。

私たちの暮らしに身近な消費財である陶磁器類のデザインは，ヴァリエーションが非常に豊富である。ヴァリエーションをもたらす要素は主にふたつある。ひとつは皿，ポット，カップ・アンド・ソーサーなど，機能・用途による形の違いで，これに加えてそれぞれの製品にはサイズや容量の差によるヴァリエーションが存在する。もうひとつは装飾によるヴァリエーションである。装飾には，たとえばポットの把手や注ぎ口の形のように機能と一体化しているものもあれば，釉薬による彩色や絵付け，レリーフ模様など，機能とは別に純粋に装飾として施されるものがある。このうち絵付けには手作業によるエナメル絵付けと，18 世紀半ばに発明された転写印刷絵付けの 2 種類がある¹。一点一点描かれるエナメル絵付けの質と生産性が職人の技量に依存するのに対して，転写印刷では元となる版の制作には熟練が必要であるが，陶磁器への転写作業には美術的な能力や訓練は不要で，不熟練労働を利用した量産化に向けた技法である。イギリス製陶業において，この転写印刷による絵付けを最初に実践的に用いはじめた人物が，ジョサイア・ウェッジウッドであった。

イギリスの製陶業者ジョサイア・ウェッジウッド（Josiah Wedgwood, 1730-1795）の事業は主に茶器や食卓用食器を生産する「実用陶器（useful ware）」部門と，壺や置物などを中心に生産する「装飾陶器（ornamental ware）」部門のふたつにわかれていたことが知られている。

転写印刷絵付けによる製品が生産されたのは、実用陶器部門においてであり、1760年代から1780年代まで、ウェッジウッド社の陶器（クリームウェア）に転写印刷絵付けを行ったのはこの技術の発明者とされるリヴァプールのジョン・サドラーとガイ・グリーンであった²。もっとも、サドラーとグリーンは当初から食器類への絵付けを行っていたわけではない。彼らが発明した転写印刷技術は、もともとは暖炉や壁面の装飾に用いられる陶器タイルへの絵付けを目的としたものであった。それでは、サドラー＝グリーン社の転写印刷はどのような技術だったのか。それはどのようなニーズを背景に生まれたのだろうか。

2. サドラー＝グリーン社

最初にジョン・サドラーとガイ・グリーンのビジネスに関する史料と研究について触れる。

史料としては、サドラーのノートブックと、特許の申請書（後述するが、実際には申請されなかった）がある。このふたつはいずれもリヴァプールの金匠・骨董蒐集家ジョージフ・メイヤ（Joseph Mayer, 1803- 1886）³が、サドラーの娘エリザベス・メアリ（Elizabeth Mary Sadler, 1782- 1857）から入手したものである（Mayer 1873: 56）。またウェッジウッド・アーカイヴには、サドラー＝グリーン社がウェッジウッド社に送った書簡、製品送り状など約150点が現存する⁴。内容のほとんどはウェッジウッド社のクリームウェアへの絵付けに関するものだが、一部にサドラー＝グリーン社のビジネス、タイルへの言及も見られる。

サドラー＝グリーン社と転写印刷に関する研究の嚆矢は、これらの史料を入手したジョージフ・メイヤ自身による『リヴァプール陶磁史』（Mayer 1855）である⁵。また、メイヤが入手したウェッジウッド社関連史料を利用して書かれたエライザ・ミトヤードの『ジョサイア・ウェッジウッド伝』（Meteyard 1865-1866）においても、サドラー＝グリーン社によるウェッジウッド社のクリームウェアへの転写印刷絵付けに関して詳細に触れられている。

20世紀になってからもサドラー＝グリーン社の転写印刷技術への言及は続く。1876年から1929年までリヴァプール・ミュージアムでキュレーターを勤めたピーター・エントウィッスル（Peter Entwistle, d.1939）によるリヴァプール製陶業および転写印刷技術に関するペーパー（未刊行）⁶の他、1948年にはE・S・プライスが文書史料と実物史料を渉猟した『ジョン・サドラー伝』（Price 1948）を出版している。そしてこれら既存の史料、文献に批判を加え、イギリスのみならずアメリカの旧イギリス植民地地域の建築に残るタイルを含めて行われた研究がアンソニー・レイの『リヴァプールの転写印刷タイル』（Ray 1994）である。以下ではこれら先行する論考をもとに、ジョン・サドラーとガイ・グリーンの人物像を辿る。

ジョン・サドラーは、1720年にリヴァプール郊外のエイントリー（Aintree）に生まれた。

父アダム (Adam Sadler, d.1765) は、マールバラ公 (John Churchill, 1st Duke of Marlborough, 1650-1722) の低地地方への軍事行動に従軍した際に印刷業者の家に宿泊して印刷に興味を抱き、除隊後にリヴァプールのニュー・マーケット (New Market, Liverpool) に印刷店を開いた。彼はそこで『ミューズの喜び』 (*Muse's Delight*) という、曲を付けた歌詞のコレクションを含む多数の本を出版している。アダム自身、優れた音楽家でもあり、多様な楽器を演奏し、とくにヴァイオリンを好んでいた (Mayer 1873: 54)。

アダム・サドラーの息子、ジョン・サドラーは、銅版画技法のひとつであるエングレーヴィングの技術を学び、徒弟を終えた後、父からハリントン・ストリート (Harrington Street) の家を買とり、1748年に印刷出版業を始めた。彼は父親に引き続いて『ミューズの喜び』や『リヴァプール・クロニクル』 (*Liverpool Chronicle and Marine Gazette*)、ラテン語の文法書などを出版している。1766年1月、サドラーは印刷器具一式をリヴァプールで商工人名録を出版していたジョン・ゴア (John Gore, 1738-1803) に売却して印刷業から撤退した。

ジョン・サドラーとパートナーシップを結び、のちにサドラーの仕事を引き継ぐことになるガイ・グリーンは、小銭ができるとアダム・サドラーのところへ行きバラッドを買う、貧しいが利発な少年だった。アダムはこの少年を自身の印刷業の徒弟にした。以上がメイアによる説明である (Mayer 1873)⁷。

サドラーとグリーンがウェッジウッド社のクリームウェアへの絵付け事業においてパートナーシップを結んだのは1761年のことである。その後、サドラーは1770年に引退し、事業はグリーン単独の名義で行われた。タイルへの転写印刷は少なくとも1780年まで続けられた (Ray 1994: 1)。両者のビジネスの形態と変遷は、商工人名録への記載からある程度まで知ることができよう (表1)。ただし、サドラーは引退後も事業と関わり続けていた。彼のノートブックには亡くなる前年の1788年1月15日まで、転写印刷のための新しい釉薬の実験結果などが記入されている。グリーンとウェッジウッド社との取引記録は彼が亡くなった1798年まで続いている⁸。

3. 転写印刷技術の発明

1756年8月、ジョン・サドラーとガイ・グリーンは、タイルへの転写印刷技術の特許申請するための宣誓供述書 (affidavit) およびリヴァプール在住の3人の人物が署名した証明書 (certificate) を準備した。

宣誓供述書によれば、サドラーとグリーンは、1756年7月27日火曜日に、他の人の手助けなしに、午前9時から午後3時までの6時間で、1200枚のタイルに多様な図柄を印刷できた

表 1：商工人名録におけるサドラー＝グリーン社の記載

年	Directory	氏名／職業／住所	
1753	The Liverpool memorandum-book	Printing-Office, Mr. John Sadler	Harrington-street.
1766	Gore's Liverpool Directory	Sadler and Green printed ware manufactory	harrington street
1767	Gore's Liverpool Directory	Sadler and Green printed ware manufactory	Harrington street
1769	Gore's Liverpool Directory	Sadler and Green printed ware manufactory	Harrington street
1772	Gore's Liverpool Directory	Sadler John gentleman	Lumber street
1773	Gore's Liverpool Directory	Sadler, John gentleman	Lumber Street
1774	Gore's Liverpool Directory	Green Guy china printer	No. 14, Harrington street
		Sadler John gentleman	No. 3, Lumber street
	Gore's Liverpool Directory: Appendix	Green's printed ware manufactory	No. 16, Harrington st
1777	Gore's Liverpool Directory	Green Guy china printer	14, Harrington street
		Sadler John gent.	4 St. Paul's square
	Gore's Liverpool Directory: Appendix	Green Guy printed china manufactory	16, Harrington street
1781	Gore's Liverpool Directory	Green Guy china manufacturer	14, Harrington-street
		Ditto manufactory	16, ditto
	Bailey's Northern directory	Green Guy china printer and earthen warehouse	Houghton street
1783	Bailey's western and midland directory	Green Guy china printer and earthen warehouse	Houghton street
1784	Bailey's British directory	Green Guy China Manufacturer	No. 14, Harrington-street
1787	Gore's Liverpool Directory	Green Guy China Manufacturer	14, Harrington street
		Manufactory	16, ditto
1790	Gore's Liverpool Directory	Green Guy china manufacturer	13, Harrington-street
		Printed warehouse	15, ditto
		China painter's shop	39, ditto
	Gore's Liverpool Directory: Appendix	Green & Co. painters	Haymarket
	Lewis's Liverpool Directory	Green Guy china manufacturer	13, Harrington st.
		Printed warehouse	15, ditto
		China painter's shop	39, ditto
1794	Universal British Directory	Green Guy Staffordshire-warehouse	Harrington-street
1796	Gore's Liverpool Directory	Green Guy China Manufacturer	13, Brownlow hill
		Printed China Warehouse	15, Harrington street
1800	Gore's Liverpool Directory	Green Guy China-manufacturer	Brownlow Hill
		Warehouse	14, Harrington street
	Schofield's new Liverpool directory	Green Guy China Manufacturer	13, Brownlow hill
1803	Gore's Liverpool Directory	Green Guy China-manufacturer	Brownlow hill
		Warehouse	14, Harrington street
1804	Woodward's New Liverpool Directory	Green Jane China manufacturer	Brownlow hill
		Warehouse	13, Harrington street, Castle street
1805	Gore's Liverpool Directory	Green Mrs. Jane	10, Brownlow hill
1807	Gore's Liverpool Directory	Green Mrs. Jane	10, Brownlow hill

※このほかに 1779 年に William Watts の銅版画集『The seats of the nobility and gentry』の subscriber として、「Mr. Guy Green, Engraver, Liverpool」の名前が挙がっている。

という。証人たちは、その数、見映え、出来映えは、100 人の熟練した職人が通常の手作業による絵付けによって同じ時間内に行うよりもよいとしている。このタイルへの転写印刷技法の発明と実験は 7 年の歳月を要し、多大な努力と支出によって完成を見た。また転写印刷されたタイルは、熟練職人が絵付けを施したタイルに対して半額近い価格で売ることができるだろうと記され、これによってイングランドやアイルランドに大量に輸入されているオランダ製タイ

ルの価格を下げることになり、そのことが国家およびリヴァプールにとって大きな利益になるであろうことが述べられている⁹。

この特許は結局のところ申請されずに終わった。なぜだろうか。メИАによれば、ふたりが友人たちに相談したところ、この技術は非常に珍しいもので、簡単に見つけ出すことはできないだろうこと、また他の者たちがこの特許に抗議するまでにはかなりの時間がかかるであろうことと、申請によって最も価値がある技術と秘密が公表されてしまうことはもちろんのこと、特許の保護に付随する多大な費用とその保護の遅延を考えれば、特許を取得するという考えは放棄したほうが賢明であると考えられたのだという (Mayer 1873: 56)¹⁰。

特許が申請されなかったもうひとつの理由として、技術の新規性を考えねばならない。宣誓供述書には技術の開発に7年の歳月を要したとあり、額面通りに受け取ればサドラーは1749年頃には転写印刷技術の着想を得ていたことになる。しかしレイはおそらくそれは誇張であろうと述べている。実際には陶磁器への転写印刷には先行者がいる。現在知られているところでは、それはバーミンガムでエングレーヴィングを学んだアイルランド人のジョン・ブルックス (John Brooks) である。1751年9月10日に出願した特許には、琺瑯製品や陶磁器にエングレーヴィング、エッチング、メゾチントによる銅版、および彫刻した木や金属から図柄を転写する技術が記されている。この技術はバーミンガムからロンドン、ウスター (磁器製造所)、そしてリヴァプールに伝わった。ブルックスの特許は認められなかった。またサドラーとグリーンがブルックスの特許に触れていないことは、転写印刷が独占を認められないような、周知の技術であったことを示唆している。ただし、「発明」に関するサドラーの主張には一点だけ正当性があるとレイは述べている。それは他の誰もこの技術をタイルへの転写印刷に応用していなかった点である (Ray 1994: 3)。

サドラー＝グリーン社による「発明」の新規性は別として、宣誓供述書に記載された、この技術がもたらす効果の指摘は重要である。すなわち、転写印刷技術は絵付け工程における生産性の高さと質の高さを両立した上で価格を下げるのが可能であるということと、オランダから輸入されるタイル (デルフト焼タイル) への対抗が意識されている点である。多様な色彩と諧調を用いることができる手描きの絵付けとは異なり、転写印刷は単色である上に使用できる色数に制約があったが、熟練を排し高い生産性を求める技術展開のありようは、イギリスおよび大陸ヨーロッパの実用的な陶器の市場からオランダ・デルフト製品を駆逐していった18世紀後半イギリス製陶業全般の発展と軌を一にしていたと考えられよう。

ひとつ疑問となるのは、印刷出版業を営んでいたサドラー＝グリーン社が、なぜタイルや陶磁器への転写印刷技術を「発明」するに至ったのかという点である。メИАの説明によれば、サドラーは子供たちが人形の家を飾るために製陶所から拾ってきた壊れた陶器に印刷のヤレ紙

(印刷ミスなどによって廃棄される紙)を貼り付けているところを見かけてその着想を得たのだという (Mayer 1855: 9-10)。この説明は 19 世紀半ば、メИАの時代に行われていた転写印刷の技法に照らしてみればそれらしく思われるが、転写印刷技術の発展過程を追っていくと多分に疑わしいことが分かる。

サドラーとグリーンによる特許の申請書には転写印刷の技法、手順について具体的にはなにも示されていない。しかし、近年の研究によれば、陶磁器への転写印刷には概ね時代順に 3 つの異なる技法が用いられていたことが分っている (Ray 1994: 4-5)。以下に概略を示す。

- ①木版 (woodblock) を用いる方法。図柄を彫った木版にオイルを付け、紙にスタンプのように写す。この紙を白い釉薬を掛けて焼き上げた陶器の表面に載せてナイフのようなもので擦って写す。ここに釉薬の粉末を振り掛けるとオイルで湿った部分に釉薬が付着する。乾燥させて余分な釉薬を払った後、絵付窯で焼成すると、図柄が器に固着する。
- ②バット・プリンティング (bat printing) と呼ばれる方法。図柄を対象物に写す際に、紙ではなく動物性のゼラチンの薄いシートを介する。このシートをバットという。版には絵画などの印刷に用いられる銅版と同様のものが使用されるが、印刷インクの代わりにリンシード・オイルが塗布され、このオイルをいったんバットに転写したあと、バットを器の表面に当て描線を転写する。以降は①と同様で、釉薬の粉末をふりかけると描線部分に釉薬が残り、焼成によって図柄が固着される¹¹。バットは作業後にまとめて溶かして再利用される。
- ③銅版を用いるが、バット・プリンティングに用いられるオイルではなく釉薬を練り込んだインクを使用する方法。熱した銅版に熱したインクを塗布し、石鹼水で湿らせた薄紙を乗せてプレス機で図柄を転写する。転写した紙を器に乗せ、ネルの布やヘラで擦って貼り付ける。紙を濡らして器から剥がすと、図柄が表面に残る。乾燥させせた後、絵付窯で焼成する (図 1 参照)¹²。

かつてサドラーはタイルの生産において③の方法を用いていたとされてきたが、初期のタイルの多くは①の木版による方法でプリントされ、1760 年ごろから②のバットによる方法が用いられるようになり、サドラーが引退する頃には③のインクを転写する方法が行われるようになった (Ray 1994: 4-5)。

サドラー＝グリーン社による転写印刷が最初に①の方法で行われていたとするならば (実際にそうだった)、前述した発明のきっかけについてのメИАによる説明は適切ではない。逆にメИАの時代に③の方法が行われていたことを考えれば、そこから発明のきっかけが子供たちが印刷物のヤレ紙を陶器に貼り付けているところを見たからという解釈を生み出したであろうことが想像できる。いずれにせよ、転写印刷の発明に関するメИАの説は正しいとは思われない。

図 1：陶磁器への転写印刷——19 世紀前半



Engraving designs on Copper Plates, for producing the much admired blue printed pots, &c.

Printing on thin paper, impressions transferred to the fired ware, and paper washed off.



（上）転写印刷のための彫版。

（下）手前は銅版にインクを付けプレス機で紙に転写している様子。奥の女性たちは転写された紙を陶器の表面に擦りつけ、インクを転写した後で紙を水で洗い流している。

出典：E. Wood, *A representation of the manufacturing of earthenware*, London, 1827, plate 10, 11.

他方で、サドラーとグリーンが最初に①の木版による方法を用いていたとすると、印刷出版業を営んでいた彼らが陶磁器への転写印刷を試みるに至ったことには、より説得力のある説明が可能であろう。なぜならば、父アダムの時代以来、彼らが手がけていた出版物は活字を主体としたもの、すなわち活版印刷（凸版）であり、銅版画（凹版）ではなかったからである。彼らの出版物のページには、テキストに加えてしばしば装飾模様が施されている（図2参照）。このような装飾を活字と組み合わせて印刷するためには、装飾部分も凸版で制作しなければならない。筆者の手元にあるサドラーの出版物はマイクロフィルムからの複写であるために、用

いられた印刷方法を正確に知ることは難しいが、おそらく活字と木版（木口木版¹³）の組み合わせであったと推察される。サドラーとグリーンのもとでの「発明」が図柄を木版に彫刻し、紙をメディウムとして転写するものであったとすれば、彼ら印刷業者にとって日常的に行われていた方法をタイルへの転写印刷に応用したものであったということになるのである¹⁴。

サドラーが木版による転写印刷を手がけたのは1756年から1757年までの短い期間であった。それではなぜ①の木版から②のバット・プリンティングに移行したのだろうか。

バットをメディウムに用いる②の方法から薄紙を用いる③の方法への移行は、同じ版の素材（銅版）と技術を用いながらも作業工数を減らし生産性を上げる工夫の結果と考えられる。しかし、①の木版と紙の組み合わせと②の銅版とバットの組み合わせとは、工程、工数には大きな違いはないが、版の素材と彫版技術、メディウムへの転写方法が異なり、技術的な飛躍が見られるのである。そうであれば、この移行の背景には生産性の向上とは異なる要求があったと

図2：ジョン・サドラーによる出版物の例



ページ上部の装飾画は木版によるものと考えられる。

出典：Apollo's Cabinet or the Muses Delight, Liverpool, printed by John Sadler, in Harrington-street, 1757, p. 1.

考えられよう。

この技術的移行についてのプライスによる説明は次の通りである。すなわち、木版によって転写印刷されたタイルが当時のイギリス人の趣味に合わず、売れなかったのである。市場は主にアメリカ植民地に限られた。国内に残されているこの時代の事例が限定的で、アメリカに多く見られるのはそのためである (Price 1948: 53)。レイもこの説に同意し、1757年にサドラーが『リヴァプール・クロニクル』の刊行を始めたのは、結局のところタイルの転写印刷よりもより利益が得られると考えたからだ、としている (Ray 1994: 6)。

しかしながら、ここで言われているイギリス人の趣味は、技術的な要因に左右されるものであったのだろうか。それとも、転写印刷されるモチーフの違いによるものだったのだろうか。後者であるならば、それは木版では表現できないものであったのだろうか。このことを確認するためには、技術による表現とモチーフの相違を実物史料にあたって比較すると同時に、当時のイギリス国内外のタイル市場の状況を検討する必要があるが、ここではその点を指摘するに留める。

②のバット・プリンティングへの移行後は、転写印刷タイルに十分な需要があったことは確かである。1764年にジョン・サドラーがジョサイア・ウェッジウッドに宛てた書簡には「私たちは数ヶ月の間タイルの生産を行うことができます。貴殿もご存じの通り、非常に需要があります」(WMSS W/M1431, 5 Jan. 1764)、「私たちはタイルの生産にかかりきりです。定番化に向けて約60の図柄を作りました」(WMSS W/M1431, 31 Aug. 1764)など、生産のみならず図柄の工夫にも力を入れている様子が見られ、1760年代半ばにはウェッジウッド社のクリームウェアへの絵付けとともに彼らのタイル・ビジネスが好調だったことがうかがわれる。そしてサドラー＝グリーン社は1766年には印刷出版業から撤退し、転写印刷事業に専念している。その後、転写印刷事業のうち、タイルへの絵付けは1780年頃で途絶えている。この後もウェッジウッド社のクリームウェアへの転写印刷絵付けが継続していたことや商工人名録への記載を考え合わせると、グリーンの事業は陶磁器への絵付けと販売にシフトしたことが示唆される (Ray 1994: 1)。

3. むすびにかえて

サドラー＝グリーン社による転写印刷技術は、ウェッジウッド社のクリームウェアへの絵付けの点から言及されることが多い。その場合、ジョサイア・ウェッジウッドの経営と製品の革新性に影響されるためか、転写印刷技術の新規性に焦点が当てられがちである。しかしながら、プライス (Price 1948) やレイ (Ray 1994) の研究により、リヴァプールにおける転写印

刷技術の「発明」はイギリス各地で生じた同時代的な発展の一部であることが明らかにされた。他方で、サドラー＝グリーン社が用いたタイルへの転写印刷技術の「発明」と実際に使用された技術の変遷は、一方では転写印刷業者による市場や製品への対応の様相を語るものであり、もう一方では工程における熟練職人への依存を減らし生産性を向上させるというイギリス産業革命期の一般的な技術発展と軌を一にするものであったことを示している。転写印刷技術による陶磁器への絵付けは18世紀末から19世紀にかけてこの産業全般に普及し、他の工程における生産性向上とともに、イギリスのみならずやがてヨーロッパの陶磁器製品の大衆化に資していくことになる。

本稿では、絵付けに用いられた図柄や色など、デザインに関する要素は考察できなかった。転写印刷絵付けの対象がタイルや陶磁器といった消費財である以上、どのようなデザインを採用するかは製品の販売を左右する重要な要素であり、また当時の市場における趣味のありようを明らかにする史料でもある。この点については稿を改めて考察したい。

参考文献

リヴァプール商工人名録

Gore's Liverpool Directory: 1766, 1767, 1769, 1772, 1773, 1774, 1777, 1781, 1787, 1790, 1796, 1800, 1803, 1804, 1805, 1807. *Bailey's Northern directory*: 1781. *Bailey's western and midland directory*: 1783. *Bailey's British directory*: 1784. *Lewis's Liverpool Directory*: 1790. *Universal British Directory*: 1794. *Schofield's new Liverpool directory*: 1800. *Woodward's New Liverpool Directory*: 1804.

Boney, K. (1957), *Liverpool porcelain of the eighteenth century and its makers*, London.

Drakard, D. (1992), *Printed English Pottery*, London.

Entwistle, P. (around 1920s), *Peter Entwistle Collection of Materials for a History of the Liverpool Potteries*, Unpublished papers, Liverpool Record Office.

Sadler and Green and the invention of transfer-printing on pottery etc. (942ENT02: 136-148).

Sadler and Green, and Liverpool Engravers (942ENT11).

Mayer, J. (1842), *A synopsis of the history of the manufacture of earthenware*, Liverpool.

Mayer, J. (1855), *History of the Art of Pottery in Liverpool*, Liverpool.

Mayer, J. (1873), *On the art of pottery: with a history of its progress in Liverpool*, Liverpool.

Meteyard, E. (1865-1866), *The life of Josiah Wedgwood: from his private correspondence and family papers ... with an introductory sketch of the art of pottery in England*, 2 vols., London.

Price, E. S. (1948), *John Sadler: a Liverpool pottery printer*, Liverpool: Published by the author.

Ray, A. (1994), *Liverpool printed tiles*, London.

Wood, E. (1827), *A Representation of the manufacturing of earthenware*, London.

新川徳彦 (2010), 「18世紀後半イギリス陶器におけるデザインの選択」『デザイン史学』第8号, pp. 13-35.

新川徳彦 (2009) 「デザイン史の中のウェッジウッド」『デザイン理論』55号, pp. 53-67.

注

- 1 さらにいえば、絵付けには器全体を覆う釉薬の上から行う上絵付け (over glaze) と絵付けの上から透明な釉薬をかける下絵付け (under glaze) とがある。いずれも現在では手描きと転写印刷のどちらも用いられる。
- 2 ジョン・サドラーとガイ・グリーンの特許の形態は時期によって異なるが、ここでは便宜的にサドラー＝グリーン社と呼ぶ。なお、ジョサイア・ウェッジウッドとサドラー・グリーン社の取引関係については、新川 (2010) を参照されたい。
- 3 ジョージフ・メアはウェッジウッド文書の発見者でもある (新川 2009: 54)。
- 4 Wedgwood Manuscripts (WMSS), E4-30475～30476; E5-3394～3663; W/M1431 (aprox. 150 items); L7-1088～1110; W/M1716 (aprox. 50 items); W/M1768; E54-30725～30726。
- 5 1842年に刊行された『製陶業者略史』(Mayer 1842)においてもメアはサドラーの転写印刷技術についてわずかに触れているが、その内容はその後の文献と比較すると誤りが多い。プライス (Price 1948: 9-10) によれば、メアが当時72歳だったジョン・サドラーの娘エリザベス・メアを訪ね、サドラーの生涯とビジネスについて詳細を得たのは1854年で、サドラーの没後65年が経過してのことである。『リヴァプール陶磁史』(Mayer 1855) や『製陶業の技術およびそのリヴァプールにおける発展』(Mayer 1873) に叙述され、転写印刷の発明に関するその後の文献でたびたび引用されるジョン・サドラーおよびガイ・グリーンの人物像はこのときの聞き取りによるものである。ただし、ジョン・サドラーとエリザベス・メアの母親エリザベス (Elizabeth Parker, 1754-1842) の結婚は1777年、サドラーが1770年に事業から引退して7年後のことである。そしてサドラーは1789年、エリザベス・メアが7歳のときに亡くなっている。メアがエリザベス・メアから聞き取った内容は、彼女がおそらく母親から聞いたサドラーの生涯についての知識であろうことに留意する必要がある。また、メアは自身と同時代に行われていた転写印刷技術を前提にサドラーの貢献を類推しているが、他でも検討するように1750年代の転写印刷技術は1850年代とは異なっており、彼の説明には事実に基づいていないと考えられる部分が多々見られる。
- 6 エントウィッスルのペーパーはリヴァプール・レコード・オフィスに所蔵されている (*Peter Entwistle collections for a history of the Liverpool potteries*, Liverpool Record Office, 942 Ent 1-37)。エントウィッスルの経歴については次の URL を参照。 <http://www.entwistlefamilly.org.uk/BiographyPeterEntwistleFRAI%20.pdf> (2020年1月31日閲覧)。
- 7 メアは、ガイ・グリーンがアダム・サドラーの印刷業を引き継いだ ('Mr. Guy Green, who had lately succeeded Mr. Sadler's father in the printing business') とするが (Mayer 1855: 10)、リヴァプールの商工人名録には印刷業者としての記載は見当たらない (表1参照)。
- 8 ウェッジウッド社のクリームウェアへの転写印刷絵付けは1798年まで記録が残されている (新川 2010: 20-21)。
- 9 宣誓供述書と証明書の写真はBoney (1957) に掲載されている (Plate III, IV, V)。なお、メアがジョン・サドラーの娘から入手した宣誓供述書と証明書はその後ジョン・サドラーのノートブックとともにリヴァプール・レコード・オフィスに納められていたはずであるが、筆者が2002年に調査した時点では所在不明とのことであった。
- 10 メアの説明を裏付ける史料はないが、サドラー＝グリーン社が1780年頃にタイルへの転写印刷を止めて陶磁器の絵付けに専念するようになるまでにリヴァプールには彼らに匹敵する競合が現れなかったことを考えれば、その説明は必ずしも否定しきれない (Ray 1994: 1)。
- 11 ①と②の違いは、木版 (凸版) か銅版 (凹版) か、および印刷する対象物とのメディウムとして紙を用いるかパットを用いるかで、作業の工数はほぼ同様である。
- 12 ③の方法は②のパットとオイルを用いる方法に比べて容易、安価で、オイルの代わりにインクを用いるため色粉をふる工程が不要になった。また当初は一枚ものの版とプレス機の組み合わせが用いられたが、後にはキャリコ印刷同様にシリンダー状の版を用いた連続的な転写紙の生産が可能になり、生産性はさらに向上

した。なお、木版や銅版から直接対象物に転写せず紙やバットを介するのは、平滑ではない陶磁器の表面にかすれさせることなく図柄を写すための工夫である。現在でも陶磁器への印刷には版から直接に転写するのではなく紙やフィルム、シリコンなどのメEDIUMを介する方法が用いられている。

- 13 木口木版は木の木口を版面にした版木に彫った木版画をいい、板目木版に比べて版が丈夫で、より繊細な表現が可能である。写真製版が登場する以前、活字と図版を組み合わせる印刷に用いられた。
- 14 ジョン・サドラーが手がけていた出版物が活版印刷であったことに加えて、タイルへの転写印刷が木版を用いたものであったとすると、サドラーが独立前に銅版画技法のひとつであるエングレーヴィングを学んだというメイアの説明には疑問が生じる。歌詞集や文法書、哲学書の出版にエングレーヴィングの技術は不要と考えられるからだ。実際「サドラーはエングレーヴァーを自称したことはない。彼はつねにプリンターであった」とプライスは述べている（Price 1948: 21）。